

■テーマ展

再発見！亀ヶ岡文化 — 豊岡遺跡展 —

会期 平成16年1月11日(日)～2月11日(水・祝日)

亀ヶ岡文化を再発見しよう

東北地方を中心に展開した縄文時代晩期の文化を「亀ヶ岡文化」と呼んでいます。

よく知られた文化名称であるため、その内容の解明が進んでいると考えられがちですが、豊富な出土遺物にも関わらず、それらの意味しているところなどは、まだまだ研究途上にあるといえます。

当館では、平成12年度に「蒔前遺跡と雨滝遺跡」展を開催し、馬淵川流域の亀ヶ岡文化を紹介しました。今回は、北上川上流域の遺跡から、亀ヶ岡文化を再発見していただきたいと思います。

とよおか
岩手町豊岡遺跡

豊岡遺跡は、岩手町大字久保にある、岩手県を代表する亀ヶ岡文化の遺跡です。

1959(昭和34)年に草間俊一氏によって発掘調査が行われ、その前後に岩手町在住の高橋昭治氏によって多数の遺物が収集されたことによって、遺跡の重要性が明らかになりました。



豊岡遺跡近景(1965年ごろ)

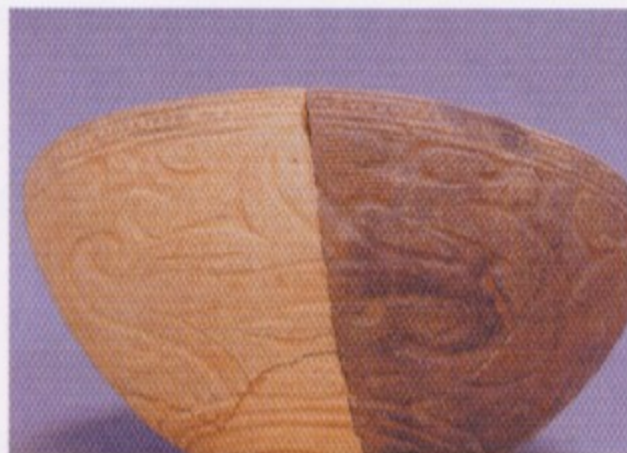
出土遺物は、岩手大学、岩手県立博物館及び高橋氏が保管していましたが、平成13年度に高橋氏保管資料が岩手県立博物館に一括して寄贈されました。その内訳は、概数で縄文土器400点、土器片13000点、石器類2400点、土製品150点、石製品300点です。

棄てるという行為

亀ヶ岡文化の遺跡を発掘すると、集落のはずれの斜面などに、こわれた土器片や石器を作る際のくず、食べもの

の残りと考えられる動物の骨片や炭化したクルミの殻などが大量に出土します。考古学では、このような場所が発掘されると、「遺物包含層」と呼んだりしています。

遺物包含層には、ときどき赤く変色した焼け土がまとまって見られることがあります。豊岡遺跡でも、焼け土がまとまっていた箇所がありました。ここから出土した土器のなかに、色が明るく変色したようなものがあります。火を受けた影響と思われる。



火で変色した土器

リサイクルされる道具類

豊岡遺跡の縄文人は、使えるものとはほとんど使い込んでいたようです。木を倒したりするのに用いられる石斧は、刃が欠けたりするとうまく切れなくなります。刃をときなおして使うこともありますが、どうしても使えなくなったものは、ハンマーとして使い込んでいるようです。縄文時代のハンマーは、石器を作る際の道具として重要なものです。

縄文時代にもっとも多く作られたと考えられる石器は石鏃(やじり)です。硬いものにぶつくと、すぐに破損します。鋭い先が残っているもののなかには、穴あけ用のドリルとして用いられたものもあるようです。

また、土器や土偶などはちょっとした不注意でもこわれたりしますが、少しのひび割れなどは、アスファルトで接着したり、ひもで固定したりして使っていたようです。アスファルトは物々交換で手に入れた貴重なものと考えられますが、

こうしたなかに、縄文人の物に対する意識をうかがうことができます。

赤のしるし

豊岡遺跡からは、赤く塗られた土器や土偶、石棒などが出土しています。時には漆が使われて、なめらかに光った赤に見えることもあります。色が塗られていることで、遺物のイメージが大きく変わることはいうまでもありません。

豊岡遺跡では、赤色を塗る作業をしていたらしく、赤色がこびりついたような磨り石や台石が出土しています。赤色は、黒とともに、亀ヶ岡文化を特徴づけているといえるかもしれません。

転換された材質

豊岡遺跡出土遺物のなかには、本来石で作られていたものが粘土でつくられたり、かごの形が粘土で作られたりしています。

凝灰岩などの軟らかい石を加工して、人がたに仕上げた製品を岩偶と呼んでいます。亀ヶ岡文化で作られる岩偶はととても特徴があり、ひと目でそれとわかるようなものです。同じ人がたでも、土偶とはもようなどがまったく違います。岩偶は馬淵川流域周辺の遺跡を中心に時々出土します。



粘土で作られた岩偶のデザイン

今回、再び当館で亀ヶ岡文化をテーマとする展示会が開催できたのは、高橋昭治氏の長年にわたる考古学的研究と文化財保護活動のたまものといえるでしょう。

(主任専門学芸員 佐藤嘉広)